

令和7年度 大阪市立港南中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪府教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【=Computer Based Testing】とする）で実施。

学年		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)			平均IRTスコア
実施月日			国語	数学	国語	数学		理科
3 年	学校	122	53	44	4.6	7.3	学校	482
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2	大阪市	489
4月17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6	全国	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会	数学	理科※	英語	国語	社会	数学	理科※	英語
3 年 9月2日	学校	117	64.0	50.7	52.4	44.8	54.1	4.2	3.8	9.5	7.4	5.9
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	48.2	54.4	6.1	5.8	11.1	8.6	6.5
	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	48.1	53.2	6.8	6.5	12.1	10.0	7.4

※ 3年生の理科はA問題を選択

令和7年度 大阪市立港南中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

○中学生チャレンジテスト(3年生)

＜国語＞

◆成果

- ・行書や文法を直前に確認し、特に行書の得点率は府平均を大きく上回った。
- ・普段から、解答用紙の空欄を作らないよう指導し、無回答率は低かった。また、19点以下が0人、95点以上が4人と2年生の頃に比べて得点できる生徒も増えた。

◆課題

- ・グラフの読み取りや活用問題を1年の頃から取り組んできたが、3年生では行事や実力テスト対策などの時間の確保の都合上、1、2年の頃に比べチャレンジテスト対策の時間が設けられなかった。
- ・解答スピードが遅く時間配分に課題が残る。また、冊子型のテストに慣れていないので、過去問は冊子形式にしたほうが良かったと思われる。

＜社会＞

◆成果

- ・無回答率は府の平均点を下回った。

◆課題

- ・知識の未定着 語句・場所→語句を問われる問題で正答率が伸びなかった。
- ・時代、地域ごとの特徴の整理→表から地域、国、都道府県を選ぶ問題への対策
- ・資料を読み取る力

＜数学＞

◆成果

- ・入試の小問集合の練習をしたこともあり、四則計算、連立方程式、根号を含んだ展開といった計算が大阪府より、正答率を上回ることができ、数と式の領域においても大阪府の平均を上回った。基礎的な知識・技能を問う問題ができるようになり、定着してきたと考えられる。

◆課題

- ・図形・関数・データの活用の領域において大阪府の平均を下回った。問題文から問題を解くにあたっての条件の読み取りや活用する問題の練習が必要である。前年度よりも関数の領域においては大阪府平均には近づいたがより一層練習が必要である。

＜理科＞

◆全体

- ・大阪府平均に対して、3.3ポイント下回り、中央値も3.5ポイントと大きく下回った。度数分布を確認する限りでは、上位層の割合がやや低く、中間層の割合が高いものの下位層の割合もまた比較的高い。それぞれの生徒の実情に応じた学習展開が必要であることがうかがえる。

◆分野

- ・単元別に見ると、全体的に大阪府平均を下回っているが、多くは1点以下の差であり、「粒子」分野に限って2点下回っている。平均を下回っている問いは、計算を含む応用的な問いであることが多く、問われていることがわからないままに解答しているであろうと思われ、読解力の向上、入試問題など一問一答以外の問いの解答への慣れが必要である。基礎・基本は昨年度よりも定着してきているため、問題解答の練習をする機会をより多く設けていくことが必要である。

◆解答形式

- ・無解答率が、ほとんどの問いで府平均を下回っており、きちんと埋めようとする前向きな姿勢が見られる。この姿勢を生かすためにも、個人のもつ実力が存分に発揮できるよう、練習への慣れをつくっていく。

＜英語＞

◆成果

- ・大阪府の平均を超えることができた。文法と長文を分けて授業を行ったのが効果的だった。

◆課題

- ・過去問の解説の時間をより多くとることができていたら良かった。